静と動。

まさに二つの顔の海を一度に満喫出来る。 そんな究極のダイブトリップ、それがメナド&レンベである。

Photo & Text : Takuya Nakamura

web magazine 2014.mar. vol.31













メナド空港からおよそ2時間。車に揺られてたどり着いたカサワリリゾートは山の奥にひっそりと佇むまさに隠れ家のような場所であった。 船着場から海を眺めると、レンベ海峡を挟んだ正面にレンベ島が浮かんでいる。

リゾート側のスラウェシ島とその向こうに浮かぶレンベ島の間に広がる砂地の海底はまさにレア物満載のワンダーランドなのだ。

「潜水時間80分。これがここではみんな当たり前ね。」日本語が達者なガイド、ハニーさんの言葉にいきなり驚かされる。いくらカメラ派が集まる海とはいえ、相当な自信が無ければ毎回80分は間がもたないのでは? いやはや、そんな疑いは潜行して5分も立たないうちに消え去った。バンガイカーディナルフィッシュ、ヘアリーフロッグフィッシュ、ワンダーパス、ヒョウモンダコ、ミミックオクトパス、イッポンテグリの幼魚、レーシースコーピオンフィッシュ etc…。次々と紹介されるレアな生物達に唖然とする。こりゃあいくら時間があっても足りない。普通は潜水時間の大半が生き物探しか移動時間にとられるのだが、レンベのダイビングはその殆どが撮影時間に費やせる程の濃密さ。マクロ派ならずとも思わず一眼レフを持って入りたくなる海なのだ。実はマンタやジンベイザメなどもこの海域に出現するというからさらに驚きである。















Menado & Lembeh

旅のもうひとつの顔であるメナドのココティノスリゾートへの移動は レンベから車で 2 時間ほど。ダイビング器材や水中カメラはレンベのカ サワリリゾートから籠に入れたままトラックで運んでくれるのでリゾート 間の移動も楽チンだ。

メナドでのダイビングスタイルは、リゾートから片道50分ほどボートで移動した外洋のドロップオフでのドリフトダイビングが主流である。 休火山のメナド・トゥアを見上げるブナケン国立公園周辺の壮大なロケーションは海の中への期待感を増幅させてくれる。

心地よいカレントに身をあずけてカスミチョウチョウウオとアカモン ガラが舞う蒼の世界に酔いしれる。時折、優雅にゆったりと泳ぐウミ ガメとすれ違う。レンベとは又異なる透明感のある海中景観に思わず 肩の力がフッと抜ける。まるで高級レストランでコースの最期の上等な デザートを味わうような至福の時間が流れていく。

ダイビングの合間、メナド・トゥアをバックに半水面を撮影したいと ガイドさんにリクエストすると、考える素振りも見せずに直ぐさまポイ ントに船を走らせてくれた。「パーフェクト!!!」 おもわずシュノーケル をくわえながら叫んだ。もうずっとここで浮いていたい。そう思わせる ほどの夢のような景観がそこには広がっていた。







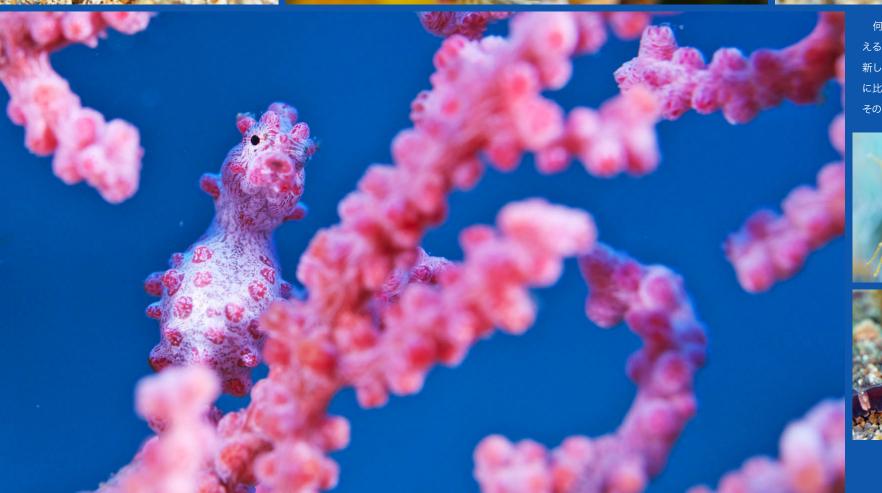
ロマンス **omance**





Menado & Lembeh





何度通っても飽きない海だとダイバーは皆口を揃 える。ダイビングに求めるものは人それぞれだが、 新しい何かに開眼出来る海というのは数少ない。他 に比較のしようがないオンリーワンの海だからこそ、 その魅力に取りつかれたリピーターが後を絶たない。



















まるでクルーズ船で旅をしているかのようなタイムスケジュールで時間が経過していく。スナックタイム→ダイビング→ 朝食→ダイビング→昼食→ダイビング→おやつ→ダイビング→夕食そしてビアタイム。そんな贅沢なローテーションの中 で私が一番好きな時間は早朝のまだ誰も居ない閑散としたリゾート内を歩くこと。朝焼けに染まるレンベ島を部屋のテ ラスから眺めているとプールの水を飲みにカモメ達がやってきた。カメラを片手に庭に出るとシーンと静まり返った桟橋 の向こうから朝日が登っていく。水辺でなにやら飛び跳ねる魚の影、南国特有の鮮やかな花々に遮光があたり、海が輝 きを放つ。そうこうしてると食堂からコーヒーのいい香りがしてきた。

さて、撮影機材の最終チェックを終わらせて淹れたてのコーヒーにありつくとしよう。











